皆様
7 月 27 日～29 日に実施された「立山夏合宿」の報告をお送りします。

俗に「梅雨明け 10 日」といわれるように、梅雨明け宣言が出てから
10 日間は夏の晴天が続き、夏山登山や海水浴に最適の期間となります。

もちろん原則があれば例外もあり…今を去る30数年前、私・五十嵐が
数日前に出た梅雨明け宣言に気を良くして今回の合宿地方面に出かけ
ましたが、好天は扇沢から針の木雪渓を登り、蓮華岳や針の木岳で
遊んだ初日だけで、その日の夕方から降り出した雨は、平ノ渡しで黒部湖を
渡り室堂平へ出るまで丸3日間降り続いた…という年もあります。
今年の関東信越と北陸地方は 7 月 21 日に梅雨明け宣言が出され、
いよいよ期待が膨らんで合宿を迎えました。

初日（27 日）は扇沢から立山黒部アルペンルート経由で室堂へ入ります。
前夜の階段滑落も当日の靴底剥落も無く、信濃大町駅に集合したのは、
事務局（という名のリーダー）斉藤（8 期）、真紅一点の西海智恵子姉御（3 期）、
後は 42 年組（4 期）が 8 名で、植村、大竹、岡林、田上、徳渕、西海、花田、
五十嵐と、計 10 名。特筆すべきは、昨年の唐松岳合宿に参加した 5 名全員が
今年も顔を見せたこと。久しぶりのアルプスに山心が刺激されたか、WHC魂が
蘇ったか、余程メンバーが良かったか、はたまた単に時間の余裕ができたからか。

扇沢からトロリーバスでダムサイトに着いて昼飯を始めた頃、眼前に雄大な姿を
見せていた立山の稜線から降りてきた雲が雨粒と雷を運んできました。ケーブル、
ロープウェイ、トロリーと乗り継いで室堂に着いても雨は上がらず、宿泊地に向けて
一旦歩き始めたものの突風に押し返され、ホテルの喫茶室で思わぬティータイムと
なりました。

雨具の完全防備をし、夕暮れ前には着くようにと意を決して歩き始め、氷雨と
雷鳴の中を 30 分、2晩お世話になる雷鳥荘へ到着、濡れたものを乾燥室に
吊るし、早速あったかい温泉に飛び込みました。手術跡自慢をする者が多く、

肉体自慢は約 1 名のみ、その後、浴衣に着替えてくつろいでいると・・・
・・・霧が晴れ、周囲の山々から日本海まで見えたのです。

28 日、夜中に吹きまくった強風はベランダに置いた傘を飛ばしただけで、雲を吹き払うには至らず、深いガスの中の夜明けとなりました。6 時朝食後待機。
雄山へ登るほどの好天は望めず、一方、午後は大雨になるとの予報に促されて、午前中は雷鳥沢一帯の散策に出かけました。沢を渡り、雪渓を歩き、田上講師の解説による高山植物観察会、すいぶんたくさんの花が山肌を彩っていました。そうそう、最重量者が乗ったとたん大音響とともに雪渓が崩れ落ちるなんていうハプニングもありましたっけ。さらに硫黄の臭いの立ち込める地獄谷巡りをして、3 時間ほどの散策を楽しみました。

戻ってから、温泉、ビール、昼食と、こちらはまさに地獄を見た後の天国の趣き。
その後は、花の名前を確認する者、再び湯に入る者、難行句行に取り組む者、
布団にもぐり込む者、ひたすら飲み続ける者など、思い思いの時間を過ごしました。

・・・と、夕刻、大雨の予報（実際各地で豪雨による被害が続出した日です）に
反して、青空が覗き、立山の峰々が姿を現わしました。先日観た「ザ・マジックアワー」
という映画に「太陽が消えてから、周囲が暗くなるまでのほんの僅かな時間、それが
マジックアワーだ」とあります。皆で外に出て、2 日続きの大自然のマジックショーを
堪能しました。北アルプスにいるというだけで嬉しい、そんな感じもしました。

最終日（29 日）、この日も霧の中の朝風呂から始まりました。6 時朝食、7 時出発。

室堂から、車窓に広がる風景を楽しみつつ、立山駅、富山、糸魚川と乗り継ぎ、
ひたすら目指すは布施（4 期）の待つ松本「鳥幻望」。この店で、岩魚の塩焼き、
信州の馬刺し、湯葉揚げ、わさび漬け、飲み物は生ビールに、信州の「大雪渓」、
越後の「雪中梅」、さらには手打ち蕎麦と賑やかな打ち上げ式を挙行しました。

「梅雨明け 10 日」にどうにか入ったのか、少し外れたのか、とにもかくにも、
楽しい 3 日間をともに過ごした仲間達に感謝し、とりわけ企画から実行まで
お骨折りいただいた斉藤リーダーに、このメールを借りて厚くお礼申しあげます。
心残りは「雷鳥」に出会わなかったことですが、40 時間近くを過ごした「雷鳥荘」と
いう名の山小屋風温泉ホテルがすばらしかった。 ではまた来年。